

KODAK COLOR CONTROL PALETTE
LICENSED PRODUCT
© The Tiffen Company, 2000



1974
1

室晋齋其角撰

諧 誹

焦尾琴

全三冊

東都書林

文園堂藏



焦尾琴

貞享甲子の春二月仲旬子上京せしあり
日記とひふものゝ元禄戊寅の冬をすいなる
とハ一日怠るに袋さうけ箱よつと破せ
かててつと阿すりしを日師走十のあり
池魚のいさよひよ及て一塵あく失ひ侍り
幸かひゆちくの火宅を悟り人をやあま
りやとの無つミよつあひて一躬一丈乃
悔あすやなふりあぬそれありハ詭を
かほひ諫艸をやあぢるる先進の志



のそ忍をこれゆるまはるれか〜燈籠の
字もいやかこりや小豆の炬の信〜
うはも物〜はりも昔のりふなふ春
雨もあり桃梅あとおこの後〜ものを成
ぬるをほし旧友の〜こそいれ〜はら
権貴のものもあみおぼ〜ておつ〜しあ
〜とあまを果れもも〜はら〜ら
あ〜ぬる〜し〜先師〜父のあしよめで
あ〜さあ料とせ〜巻〜半、泉を〜
り〜ら追作の詞見〜山はり〜り

馬の眞のぬんりを好〜と歩初の花
あ〜ひ〜る〜神〜く社佛閣乃信情
ひ〜として境を〜は〜似〜りや〜思
物〜り〜れ〜を忘れぬ彩とゆ〜り〜れ
小双葉と成ぬ草根よりの風情あは
〜集の名も心は〜り〜し〜蔡邕〜竈
〜りやけ〜る桐を〜り出〜〜あ〜ら
〜張の琴が〜つ〜し〜焦〜る所をのつ
〜龍尾の葉〜成ぬるを名つ〜て世〜
焦尾琴と〜傳〜し信情の〜あ〜さ〜を〜彼名

琴子あつらひく人もあまじと清然あつて
かへつゝあ称羨琴あつてくくや元禄辛
己のやうく居るは比是下題あ

晋其角

焼のこは琴下下恨この柳か

尾焦^テ匪^ス琴^ニ恥^ニ手^ニ裡^ニ灑^テ松^ノ風^ヲ

鶯語有餘曲幽花夕照中

午寂題

焦尾琴

黄鳥之篇

行露

うくひすやげいと足との都を

あつてよなせて猫下袋 其角

此くははつとも汗や流あつてん 白橋

あまのりぢもよ水でそを切 毎雨

らあのみ月田へとも守る 軒 角

呼しぬくよふハ尋常か麻 搦

さういふこの辛儀を志ありも
はむり海鏡を生き見得 雨
つと交よ藤魚がさこちあから
啜ハとんてく窓のそかあ 病
千り守具足の中りまッ裸 角
生毒酢はり何やうの汗 搦
貫あても大寺を挽苦みあす 困
な路も暗くえしし看經 角
竹垣やかじしの骨まぬれり 病

井をひさみして沈す月乾 糸
雨ニ犬う棒をひくゆる糸の袖 角
芝の董よ放す阿婆陀 病
山越して何をう猿の菓子 糸
有王ととを世束を云 角
ちりめん波の糸る衣 衣 病
みよりも訓て心をめる磨 搦
我あて内とものぬ依被れ雪 角
岩ものつけは賽を赤ぬ 病

於れきハ舟こそよせて友念佛 糸
雷のやく 梵木さひし 楊
十方坪口てこそいへ 孝乃松 角
棄り又引せて釣のめんごし 糸
横を意て是ハ丸尻うを此月 困
醫師の長旅ハ下母子 極片 角
花のさハ豆腐の恩をおくし 糸
くり矢子 銀子ハ七世遣排 糸
比中まねてりけ込者の付届ケ 角

赤い色の著てやがる宇治橋 糸
夕ハ氣をよしの酒子たうあろ 楊
於席下より内冬息つむ 困
昔といて物みせん 杉 鉄之 其角
うらひすよあまの島や大和越 秋航
昔のあつひをうつ守 宿直カ 合志
ふらふいけや横きりく 思うゆハ 十丈
鷲平杖あつてある 山崎うを 紫衣

梅花之篇

四十の賀會一あふ侍平

真遊侍平くられた

其角

序秘奏よき巻をすくせて梅らんか

はくあふを鳴琵琶の飯粒 里東

蛤を吹華ようけてまきしな 潘川

寐てあふのげそをへつく舟 弥香

くしの月ぬ荷の縮乃十文字 野徑

長ハ索綯 刈上北小屋 角

松乃彼うられく唐もあひぬき 東

棧お波ハ幕よぬる 雪川

搦味嚼ふ大脇薙もくけり 徑

昔憎い上戸のやとりのを 刻香

五月あふ力を喚はうり 角

目こんまやくわんまはぐむら 東

高きしをぬ日くるさゆあふ 川

はめくして死地あとう 三日月 徑

能く及り心を離れ 山下 東

馬を茶臼子あり赤角
てつせそ花もあなも 鞍の皮 徑
水ありしして枕と母り 南川
四夏を是に片く 無^ッ竹 泣 東
苗さ尻あこが出目を引上る 川
足粒うもけぬ乃地 徑
沼津塘の隈に中をて 志津堂 東
何の石とらて 齒のぬけの 角

草納みほる牛屎をつらむ 徑
三井乃獄屋のく志^ヌ月 川
侍の直賣もあらは 衣うり 角
短氣かた乃引綱をり 東
蒲^カ生塚へ二里程とる大井川 川
愈^ニぬ^ク腕^ノあ^ナ疵^ノ徑
すし^ニ中^ノえ^ニ訓^ス井^ノ樹^ノ角
片^ノけ^ニ山^ノ椒^ノち^ノく^ノを^ノ盃^ノ川
以^テ竹^ノの一^ノる^ノや^ノ才^ノい^ノみ^ノ日^ノの^ノを^ノ 東

^{トサカ} 冨のトはふ初修寺の翁 徑

何となくとふは田中子五六反川

風あゝ〜〜りぞ襟あひり 以 東

○羅浮乃多を

おもひ出〜〜

陰持りん〜〜軒やりほとる

嘉江

寄梅祝

自号もふ代ハ覚〜〜するの梅 海屋

梅 年久

冨の〜〜かあふむあのをを控ぬ 紫香

尋梅花

おもひ子や尻やけ猿の梅ん〜〜ハ 梅指

隔年見梅

ちても梅んぬ子あし〜〜和田り酒 沼輪

梅満庭

〜〜梅越陵頻伽も宿か〜〜ん 秋航

謎合の礼の〜〜教や〜〜あゝの膏 心水

番瓶や〜〜りあ慈^{子ツカ} 梅乃枝 炭石

笠石やむちんか燭の玉所 泉石
むちんか木履のぬけぬ 島中 班徑
東なる名粟炊登りむちの花 潘川
風がくくむ白いや 神の妻 甫盛
袖くくつる名荒の彩や 橋の月 日景
芭蕉店のかみ中かたのうけお
あけれをとのそけはきり
串柿は梅をうけて送ると
せめてもの貧乏柿くく入めの華 具角

堂上、蕨

合志

老翁の身燈ををを世つえり外
るす炊りて瓢箪の夕 其角
家原の影あは目よりけりりそ 重巽
鞠よりあはく門くあはる 椽一
袖の月替や帯はる 藪風 角
猫あしらひよ提る釣成 志
殿やあ漢子より金勢 棚 一
扇の風も茶臼志あはる 巽

をばらの叱は勝を望むる
泥を一つは白世始乃児
四喜の動を能ハ申さし
世よちき宿も弓也心板首
そのわんぬ孺半くろり
ろろり架ハなてし
はらちろす狐の飯も少後川
根つけのやうあすてし
思月よ房ひびく
角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一

骨をこころる明ハ唇く
草のくはうそはてする
杖も箒もえし
悪ハ女の髪も
法杖ひおの
蒜喰の大あり
よあとの
岩檜の鼻
く手世の伯父
角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一 角 志 一

生翹り山おろくさる軒の居 巽
木版をわたくし石壇乃蔭 志
日さうりおきよりある相の心 一
漆つしよよす虚勞なり 巽
秤目のくくぬ^{コテウ}下りこよみ際 志
千五とあままけぬ直垂 一
四茶碗のくくぬ所ハ天龍寺 巽
下子の泥をさすは山眉 志
花子おれ孔雀乃玉のあすやふ 一

斜日落花人散^チ居

くさくさせきほよちりし楊子

以家

陽朱守と石の玉産ありて

強撫の律師さうし山橋 楓子
うろくい影よ化務やもろをりを衆
花つりりゆ^{カキ}先にあみわつあが 新志
古来あゆむくよとよみ^{カキ}と
お製ハちりもさうしめす山橋 楓子
雨粒やされおいひあす花を 苦園

ゆる杭や櫛せすはあし花の皮 大町

立君をいつていふ

幽霊よ出らんもけし 夜の花 柳子

片身ありくまよ下人花衣 其角

牛の尾よ髪おちけて 姥櫛 堤亭

むあれを霧のいすもる 袖の月 紫衣

ふら比子とあぢりともいふ

長揚子たかかとのりく 昌川

むく化粧花子ゆく 基込 口遊

矮屋よ座伸して 毒奴の膝をくろ

ぬ津の虫乃こやも 徳らるお象浮の

螢のよち屋にあし 心けうめよや

高園の揚ともを けり子よたてて送

めりりけるを 有くく 徳侍らて

傀儡乃けし みるあるお見が 其角

市馬めりりて ちわうつれ 徳らるり程

蕨り園をさくし 徳らる

白ややあし 即り 影を 暁我 同

右の表中郎、面上有西湖と云
りしりあせり其目高亭の如
ゆへりり夜鷹は口をのりり
雲を如に山に控りり花のくも 同
頬白れ冷めありりと物さるる 園指
あまあけて昼のりりや初梅 市中
星ちるや鶴もくくいとろ梅 重巽
ぬちむげを定りつへく山梅 楓子
あまあや梅院あま二三日 秋航

灌木

曲水よりあちくる淀の椿あり
せりれてあまくも風の笠 安石
うらむすを三間陰あ追出て玉芝
あまあかり下馬乃人 立具角
長綿乃巻よりくくもあ月野人
白萩いとよあ翠巻乃四這 木
盛こかに繪刺りあ小鷹狩 石
陸てあを次海石の角 芝

控くの肘よりけり幣袋角
蟬よりくくると増か生^封緘^石
座をうへと袖と召るく酒香木
かとう封してあ下の控立角
ほく成咎箱持ハ巻山の母^石
火控よりく小堀の香山人
飯の湯を葉く白くあくと^石
やうらにくくると花子解馬^石
はくあハ大門口のかねる母^石

乳みせせむりも難さうけり人
控はけは係むりすうも^石高下^石菱
甚も同して松尾の三木^石
小^川蠅^あ子^せち^ちあ^あと^と下^下り^り版^版角^角
りつく神^の子^子一尺の振^振菱
ひ先の是ハ二玉子あ^ある^る人^人
乱^乱向^向く^く髪^髪子^子く^くれ^れと^と悪^悪口^口木^木
藤^藤す^すれ^れ唐^唐紙^紙ぬ^ぬけ^けて^てあ^ある^る菱^菱
戸^戸極^極の^のあ^あす^すり^りく^く布^布川^川の^のあ^ある^る人^人

くお世れひのこをさるに丹の毫石
四れりれふ亭主志つお角
おゆよ牛あふくせお陣宿木
とこ一とあまう萩の鏡はし菱
鞆に紅を青をともおち人
たうれて死をうらりれうち石
悪をせふ犬のあゆるはらみ入木
舞子うおをくくは破れ川更
弓取のあよ押来る終麻山角

うらぬをこれを埋忠の雉 木

関宿旧寺

親子

かたうい子古枝もすてに大櫓
溜を極さういしく春角 具角
うち産落く破弱のうけはて琴凡
荷あてりし 〓 燈州伏子

中榮螺小川い有る門のう角
子紙くむ礮井筒こり
紅葉こ竹禄あちん車流子
刀ううむ藤掛一の角
花よい酒をうく引お鶴の色
裸こ一咄に千両の負子
女扇子帳をかろ寸も名く立ぬ角
此田の花より一の小黄昏風
時らぬ富士ハ三時の蓋子成子

可鯨う既て夕くら月角
僧いとり持奕れ中ふあて玉風
志つくもあ姑濁る目菜子
心盛壯ういれを詩を浮ん角
三里ハ何ん雪のあも昔風
岩くら海鱈魚をあ乃あ子
うてそ鼓くひくく在木角
夕涼そ寺より夏うつせそ風
ちんだの炊りみわ海橋え子

片糸を根緒くくせと云ふは
くつくつ勝手へ通る神鳴風
るららら破乱の梭桐の瘡あは
後者く 溢ちわつ寸日没 角
雪くりりり大工も瓦を吹 子
たつて啼ぬハ鬼子ぢぢぢ
高隠み猿り戸をく月ハ山 角
八重み縮つを先方の家風
世の秋や耳い辛いもみかふる 子

まろじしあを音そ^{キッ}た七^シ子
音羽とく切そしとく桶の音 角
吐くい時を傘も 杖 同
足並みくく^ハ逆さ花のとき 風
階子あうりくひらり 塙すく 同

一筆合袂上はと梅のうらさき
初はらう天狗のりい^ハあえせん 其角
管箏 肩くくをいるはく^ハト 景帘

簾ハまの吸物納して初撰 心水
 けくく木や陸を嗅ぎて火の香 露拍
 ぞくぞく人や楊やふの影 拙文
 松の香を籠抱して山さくら 九琴
 迷ひ子の一膳ひいてさくら 新文
 一むれくたくのさくらあけ風呂 三弄
 ちる此を酌のけあけも楊か 幽定
音 老のくりにて紙吹雪で
 さんさくくく十八をさくらうらま 苔浅

三月廿九日含秀亭の花子

老のくりにて紙吹雪で

音 老のくりにて紙吹雪で

清近習やむのこあしあかを波 具角
 山あらくく人をのさくらや松のひま 吉吹
 目黒の西南又山庄あり別有と号に
 天地のく間ありあつるあつる録を乃
 朝むを深く守る脩外に海やふ
 聴洞の流るる盆をひひい 業長の窓に
 螢雪ありやき四方あり空の景を倚り

巷タの花をみて富士額ヒタケをかほくと
 唇の東海をゆりて吟舌の耳病
 をたくり主人宜雨ニをくあもくしつと
 引とてあひたるを酔倒ヒして
 二すしの尾ハ角豆り山ゆらり其角
 勝槩三十二の景色をのへ作ら
 ち海をや狐乃穴をみほりくし 宜雨
 散らやせきこのあゝ棒を杖た 鹿谷
 猪乃ひるぬまや花乃 友 义雪

か内儀よ志くして飛とあお持 亀毛
 りあふあつさうなや霧のをを 落産
 細思シや成の出くろ乃所登と 虎岑
 宋景濂ノ賞ノ日本盛ノ於唐モ
 如カ被ニ牡丹ト兼ニ海棠
 禅判地ノくくまのし 牡丹根詩以病
 門ノちりほて柳門ノちりをほくひ
 懐つろのくくひすやゆあふ
 御用よが下見ノすれ花の香ノ 寺角
 必盛ノくくるあをわら人も有 同

山中吟

嫁馬や一閑をこゆれを花盤 桐子

山家

鶴の巢より嵐の外乃さくら翁

牡丹之筈

舎曲

牡丹のももこれ唇やわかれ

山陵の巢より寂をおほ山 其角

やゆ入乃天の羽を向きまきて 周東

のたす拍子よとる昼蓮 派杏

よか米袂くもほくらぬの月 角

うす氷やけあさしう 兼 曲

枝よりや用山堂、るり了急 杏

土波のくくんり掛、盤の紋 東

くん衣わりくくもをるる 兼 曲

四判を待て中宿ハ宇治 角

五月あやあややとけうの山 東

糸目ゆられて舟の流 杏 自

手さこ昆布糸經捲又氣し 角
何首烏の虫の蔓より構む 曲
けしうらぬ形ふれ糸の華路帯 杏
月におほくよ止波の字砂 杏
糸をひらり糸よ降る懸ん巻 曲
ひさく押ゆる懈のひらみ 角
場交り鞭や成るり百千巻 杏
道後木綿のよめハ巻別 杏
室鞠ハ去子のよめハ巻とやうよ 角

子ちりあわてころみ落雪 曲
燭臺を配りそこあよ夜ハ園 杏
袋おらうく角助ハ鬼 杏
名刀てはらりよとてらる搦すみ 曲
蛸同ちまつくの傘の蠅 角
松茸の菌菜よくく元拵打 杏
粉河可飛流屋有ぬの色 杏
能くしあそれ音の治帝能 角
又氣をかゝる中立て酒 曲

寺砂乃松葉を指すの事に入
 うつらう多の湯と 鞆 東
 伊入をぬきくへんて土龍 曲
 扇下はすむ碁笥の炭豆 角
 木一むきり乳もとれも花心 東
 柳の中葉も砂水の流 杏

牡丹列

老僧や如意も落す白牡丹 其栗

浪物をむわにやうううう 兎谷
 片りあうう高をよきう白禁 重巽
 うもたうう小色あめてやんか 幽火
 みのめよ郎て葉し何んか 合志
 中よあとする歌をうい 秋瓶
 けりーのあふのまとの牡丹持 其角
 白獅子のうらわをんたてこ文 沾洲
 雨をの志いしくはよは牡丹か 白獅
 白獅子物さくあうよ何んか 楓子

かんたぬ掃部の咳乃留とあせ 形叟

あつたの花よりを

あつたのやんも雲のよきまふ 病相

徳儀より先一目へてさうぞ 楓子

夕乃身

入相の上を唱あ 母らんうあ 琴風

うられあや矣んも潤む夕牡丹 其角

筑前江を遠りけり

あつたぬ火の焼よりつる牡丹んか 同

あつた江公の帝園中芳譽をん付りて
すりし島の山けよ盃をよはあ
そり移よりこのうへおんを起て

あつたんや佐よつまの秦舞陽 孝次

紅と白とを竹筒より出して二面よ
見りけりぬを原平なやい

双牡丹このて見目りかく鼻り 以爲

徳儀の香楠よわたるをん奴 魚千

夜かへ曙も屏風越ぬ 琴風

拾れいあつたのあさ 京帝

る場あのみえよひさ 拾か 当仰

篠鞘よこさくくさくく夜かへり
姐板よ瀟やすえおとく衣文 沾洲

寄其巳

白禿のおちるまうりてこぬ
昔薬もおすりのおと志厚
醉はぬに枕みくすあなす 青川

凍少年

名あうし力をかりんよめ日橙 柳子
此のほり降る南や桐のふ 子葉

履をいてあふはくくや部云 沾池
章詠天のそこのあゆみや 吟香 午寂
尼ちや男の巻もむとす 柳子
くく山猪よあわ氣を 能 重巽
鳴る窓は小雨で茶の葉を 里本
小鞆の車くやなるや 能 甚浅
夕ぐれの班女志つめと 吟香 我常
曲終無_人声の歌を
曉の及吐_いもさありこの 子規 其角

又菊の葉をよきしりて

一声を 習の骨うねるは 柳子

鳴る地 震ふ似たり 縁の人 雪の

山畑をうねりてまじり 能 虎琴

鳴る初院の樽櫓 足跡あけ 其齋

せんぬりて 風引ぬすこ 能 琴向

鳥も 江にふるこの鳥も 十流

子就四十とらふし よきしりて 潘川

けすもくも流とめりり 鳴るり 霧

能小世々しとよきしりて 立 眩^{クラ} 堤亭

衣這ふし 鳴るすや 郭云 手角

猿江とつよ水村まで

くくく山村場の日陰や 柳子 立

足りもたまるの軒や 夢の宿 鷗花

つとて来る杖をよす 新藤川 考逸

あちふいや 霧の目どし 山一ツ 梅扇

小坂朝まで

大名の巻をくらりや 喜ひ山 其栗

六万部寺ありて

立よるを山陽の木の木柴園 柳
おれらありて畠地やうすけりり
藤くけふ花をむすへる葵形 口遊

童五

陰物つらふ物しるちり身は 竜尺
物さして糍を切や乳交 玉莢
扱そよ鼻油ひく糍りち 高拍
清愛もやく金の糸の首少 甫盛

知るをいづきの馬所の加茂指 其角
うのむや信成町一皆うらむ 虎琴

祝^ラ産^育一^ラ

けりけちを針るうけあ柳 同
たうをの皮は臍の法包てり 才海
青柳や乳母うらまの玉くじ 幽笈
三ッセツ標^ラて梅あり 双林寺 三弄
まを梅やうれよりい 登殿 入松
梅漬の番てわらう 犬張子 竜尺

搔鬢の間にたれし時ふ木 玉莢

まどくとも四月の山や乾あけ 竹竿

日しうらむさくらんふさうらむ
あさひのきりぎりす

みりあよ回一も篇や藤の葉 青霄

新魚にあらうもみよてこし 牡蠣 鹿峯

足あふの埜子あふや 牡若 治徳

唐犬の耳の由らんやかきりたる 自悦

人足ハ井せきよあふさうらりる 桐子

水漬り涙こちすやかきりたる 其角

むらやちりりかるとこト一 圃幽

くちりと縄あふする あやめ 罐木

五月あふ舟よあふや土境の音 其栗

すりのあやめももらふは五月あ 更互

そらわさるちを啼こんてあやの中 田水

呈餞赤江公

はらあふや入るへらる五月あ 中角

あてめさハ紙の篠子入あふあ 幽竹

鳥とあ餌のああふのちつさく 中角

あまの物すれせ 乙女
昼うらや地うらやの井の甲弁 文桂
いろ糸や窓のひつこい鳥帽子お 大町
麻村や家をくくろる 水陣 子母
業あま巾とひる糸や麻の中 桐子
牛あまのきもくろく 小田くろく ^{三篇}膏車
ぬき髪をひきこよ門の青田外 汀鴉
菖笠のふと脛よりそ 田桂子 雪吟
吹送う捧をいさうはあへお 聖風

香あつくは海鳥子そ

田桂はくろ根のきやきうくは 桐子
汁滴く笠のくつくや出あへん 長角
鴨の子や古根ハぶる 芦のかり 周東
葎子りも小粒とくはく 葎の中はあ
未来の花をつまむ酒をくちかて
病をさけよと宿く母をこひて
灰子て陀言やは 蔓断 子葉
お病や関を潜めく 弁菰子 雪吟
とかくして一ツもあまろり花菰子 琴風

吐を精乃ほむくくもひる舞外 其角
其もゆえは精劍をそ懐ひし 当吹
むら雨の木城こもゆるあつ外 其角
涼より外大川りいもあつ外 立 琴風
其外川猿もあつ外 涼より外 立 鶴
勘當の月あつ外 涼より外 其角
涼不來
廬生とのそつとひりりおむ乃家 其角
香薷散大つあつて雲のそつ 其角

新涼侵衣

風高しし 迎て居る中ニ階 水石
檢校のれとれやすく床 重巽
舟へ飛刺官とあつ外 其外 炭石
其外 横と投るあつ外 潘川

山本道鬼古墓

涼より思おあけくは師武者 楓子
り別く海をとりあつ外 涼より外 秋航
造す人乃藤所すし 其外 一雀

錫杖も水竿もあるや涼の舟 拙友
川簀垣牛の子とりの後くれ 楓子
艇を玉子てくましくはくみ外 其角

小金の原赤く色くちや

病江

艸いすれぢぢぢよ云つく晴約し

遠くんと家や谷風塔はく

行旅

空をいあてああうくあつとけ

今

きりまら洞を岩ぬのーあけ

適山

甚厚にくんろく焼て涼くあ

愚口

涼風や笑み添くくセほりり 当山

登ぬりの鏝のくこもやせの岑 園指

いとくくとあも院むやらの家 更互

涼まのや人目をいいて梁ス子のく人 心あ

目も涼く蕨の鶴乃の屋を 楓子

指くひり一葉もあつりけ葉なり 鈍子

香需散すくちやもらふ料理人 竜尺

なてし子よ額をせゆる昼蔭外 老仰

午時ハ突盛みれる 祭の春 玉葉

夏艸より新下枯木を小山の 楓子

大雨大風定水をうらつ日

以降乃合羽みそよく湯後也 牛角

川流や茅人形乃立おあそび 景帘

桂のゆきよて

くまゆし豆腐とりおく湯後川 琴風

てんてんてんてんてんてんてんてん

てんてんてんてんてんてんてんてん

てんてんてんてんてんてんてんてん

其神より形下村本をふ山々 楓子

大西大徳を水たううう日

以博乃谷羽ふをふく佛後が 寺様

川尾行茅人形乃並おのり 景密

在りて

今も此の山並にありて 秋川 琴風

